

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.27 No.6 June 2026

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University



6

CONTENTS

・巻頭言

「元初まりの話」の読まれ方・その3
／井上 昭洋 1

・文脈で読む「身上さとし」(25)

明治 23 年 6 月～8 月
／深谷 耕治 2

・英語文献にみる天理教 (16)

『Japan To-Day (現時の日本)』(3)
／尾上 貴行 3

・音のちから—中国古代の人と音楽 (32) 逸話を通して見る音の世界—曲芸の勝負—

／中 純子 4

・ブラジルの宗教的風景 (13)

アンテペラム期の米国系プロテスタント教会による布教活動⑦
／中西 光一 5

・図書紹介 (137)

金子 昭著『近代日本国家と天理教の時局対応』
／金子 昭 6

・おやさと研究所ニュース 7

2025 年度おやさと研究所 特別講座「教学と現代」「元の理」の学際的研究の可能性」を開催／第 386 回研究報告会 (4 月 29 日) / 2026 年度公開教学講座のご案内

巻頭言

「元初まりの話」の読まれ方・その3

おやさと研究所長 井上昭洋 Akihiro Inoue

比較神話学の視点から「元初まりの話」を読み解いたものとして大林太良の論考がある。およそいかなる創世神話も、何も無いところから突然出現するものではない。その地域に根づく民間伝承や説話が下地となり、そこから新たな物語が作り上げられていく。こうした視点に立って「元初まりの話」を分析する際に、大林が参照軸に据えるのが『天地始之事』という書物である。それは潜伏キリシタンの聖典であり、江戸時代後期に長崎外海地方や五島列島で伝承・記録されたと考えられている。「創世記」に由来するとみられる内容に、その地域の伝承や民間信仰が混入して形成された、独自の創世神話と言える。

『天地始之事』の中から大林が取り上げるのは、兄妹婚の物語である。大林によれば、兄と妹が結婚し人間の祖先となる神話は、東南アジアから中国南部、沖縄にかけて広く分布している。これは、この世の初めに大洪水で兄と妹だけが生き残り、人類の祖先になるという洪水神話の一類型である。しかし『天地始之事』では、洪水と兄妹の近親婚の順序が逆転しており、兄妹が結婚したがゆえに大洪水が起こったことになっている。土着の伝承(兄妹婚タイプの洪水神話)を母体としつつ、洪水と近親婚の順序を逆転させることでキリスト教的な罪の観念を織り込んだ、新たな創世神話が誕生したと彼は論じるのである。

『天地始之事』に向けた分析視点を「元初まりの話」にも適用して読み解く際に、大林がまず注目するのは、大和地方に伝わる「元初(1)の世界は泥海であった」とする伝承である。(2)「元初まりの話」の冒頭も泥海から始まっており、彼はこの地域の伝承が物語の下地となっていることを見て取る。その上で、大林が「元初まりの話」の独自性として最初に挙げるのは、人間の起源を正面から描いている点である。記紀神話が人間の創造を主題としないのに対し、「元初まりの話」はそれを物語の

中心に据えている。大林はここに、民間の創世神話としての「おもしろさ」を認めている。

世界各地の創世神話には材料を用いて人間を創造するモチーフがあり、泥や粘土(肉のメタファー)、木や石(骨のメタファー)などが用いられることが多い。しかし「元初まりの話」では水棲動物が創造の材料となっており、大林はここにも「おもしろさ」を見出す。沖縄には兄妹婚からシャコ貝や魚、ヤドカリが生まれ、次いで人間が誕生するという神話が複数の島に伝わり、台湾にも洪水を生き延びた兄妹からヘビ・カエル・人間が順に生まれるという神話がある。大林はこうした事例から、「元初まりの話」における水棲動物の重要性が、日本列島から沖縄・台湾にかけての地域の伝統を受け継いでいる可能性を指摘する。

最後に大林は、混沌の泥海から秩序への移行が、人間の成長と水陸の分離という二軸に沿ってなされている点に注目する。多くの神話では天地の分離によって秩序もたらされるのに対し、「元初まりの話」では水陸の分離が重要な意味を持っており、それに対応して水棲動物が重要視されているという。彼は「元初まりの話」を構成するモチーフを大和の民間信仰に位置づけつつも、同じ形の話が見つからず、内陸部の神話でありながら海の魚が重視される点についてどう考えればよいか分からないと正直に吐露する。大林にとって「元初まりの話」は、「おもしろい」が、なお「分からない」点を残す創世神話なのである。

[註]

(1) 大林太良(1987)「比較神話学からみた『元の理』について」『G-TEN』第19号、93～106頁。(『講座「元の理」の世界1:「元の理」の人間学』に再録)

(2) 天理市三島町はかつて泥海に浮かぶ三つの島であったと記す高田十郎(1933)の『大和の伝説』を、大林は紹介している。